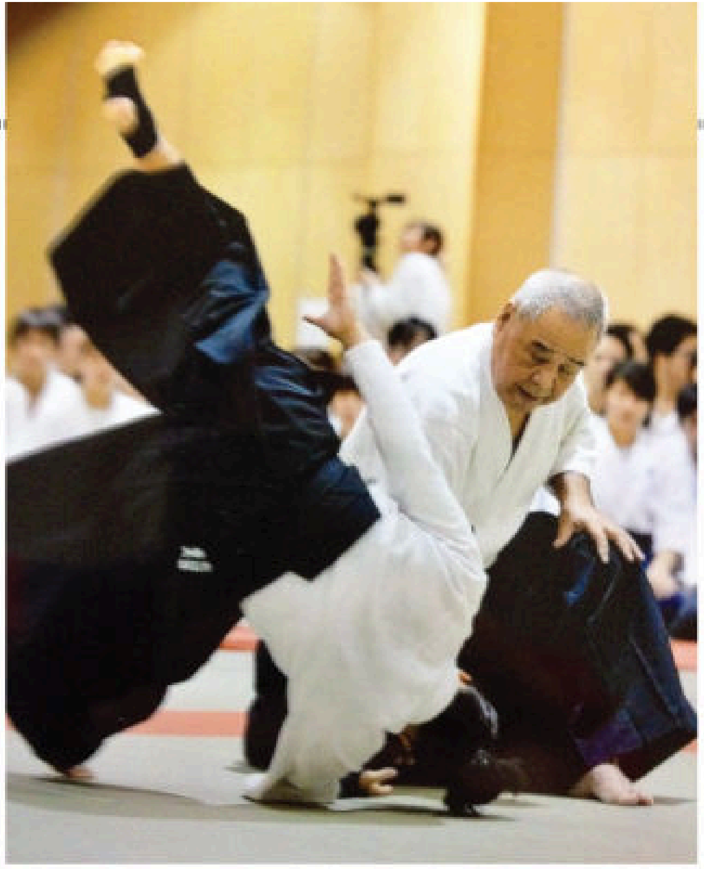

Interview

合気道小林道場 総師範
小林 保雄 さん

小平市学園東町の静かな住宅街の中に合気道小林道場がある。小さな手造りの町道場からスタートして今年で45年。この道場目指して、世界各地から合気道の修行者が集まり、また世界中に指導者を派遣している。傘下の道場は120余り。その統括をしているのが総師範の小林保雄さん（77歳）だ。

この日は朝10時から新年初稽古の日。道衣に袴の男性、女性、それに外国の方が専門指導員の笠原祐二さんのもとで稽古中だった。バシッバシッと冷気を引き裂くような音が道場に響く。畳に体が投げられる音だ。スピーディーで軽やかな受け身の技。組み合うことなしで、技をかける方はひょいと力も入れずに投げ飛ばしているかに見える。「小よく大を制す」という言葉はこのことかと感心してしまう。円を描くような自然な動きは舞踊にも似た美しさ。みなさんが清々しく、カッコよく見えた。

武道の中で唯一試合がないのが合気道。強弱を競い、勝敗を争うものではなく、相手と合い和して切磋琢磨をはかり、自己の人格完成をめざす武道である。創始者、植芝盛平翁が昭和17年に「合気道」と名づけ、国内はもとより、海外では「動く禅」とも言われ、世界の武道として広く愛され、発展してきた。

小林さんが合気道に初めて出合ったのは高校の終わり頃。それまで講道館で柔道を続けていたが、柔道の仲間に紹介され、合気道の見学に行った。当時は知る人もいない合気道、「何とも不思議な武道だ」と好奇心を持ち、明治大学入学と同時に本部道場に入門。2年余りは朝が合気道、夜は柔道と両方を稽古していた。大学3年の時には明治大に合気道部を創立。以来合気道一筋。熱中するあまり、就職試験をうけに行く筈が稽古に行って、会社の面接日を忘れてしまったというエピソードを持つ。

卒業後は本部道場の指導員となり、天才的な武道家と言われた植芝盛平翁と、合気道を世間に広めた二代道主植芝吉祥丸氏に師事。武道家としての心身の修行、道場経営の基本を叩き込まれた。また、先輩、後輩、同期の内弟子たち、通いの門弟たちと切磋琢磨し、鍛え合い、この修行時代に全てが確立されたという。

合気道小林道場誕生のきっかけ

実家は千代田区九段で大きな米屋を営み、戦後は雑貨店をやっていた。8人兄弟の5男で「好きなことをやっていい」と親から言われる恵まれた境遇。しかし昭和30年代当時、指導料としてもらう金額は月に千円。これでは生活できない。

上）初稽古の様子
下）話が弾むお茶の時間
左端が小林さん，右端がカルロスさん、
３番目がレジェプさん

合気道を通して 世界中の人々とつながる

父親が何か商売をするようにと、現在の小平の地に店舗住宅を建ててくれた。

昭和40年に結婚し、妻の保子さんと二人で八百屋と雑貨屋をやっていたものの、1年位でやめた。息子の弘明さんが生まれて、立川の会社で設計の仕事に就いたこともあったが、これも8ヶ月勤めてやめた。「どうせ食えないなら、合気道でやっていこう」と再び本部道場の指導に戻った。その頃は稽古をやりたい人がいても場所がないという時代。稽古場所探しに大変苦労したそうだ。そして大学は安保闘争に明け暮れ、指導していた合気道部員たちは目的を失い、自堕落になっていた。小林さんは彼らのために、一緒に稽古できる道場を自宅の駐車場につくろうと決意。しかし、資金がないので、自身の手造りで、苦心の18畳の道場が完成。昭和44年4月のことだった。

「年賀状に道場開きの事を書いたら、OBや友人から寄付が送ってきて、それで材料代を払えたんですよ。大学の合気道部員と3歳の息子とで稽古を始めました」これが小林道場の原点である。その後、近所の人たちが子どもに教えてくださいと、地域へ広がっていった。

国際的な道場に発展

何よりも人との出会い、つながりを大切にする。その懐の深さから小林道場には人が集まって来る。稽古に留まらず、学生たちや外国人の世話をしたのが妻の保子さん。たとえお金がない時も手料理を食べさせていた。40年の月日を経ても、その頃の感謝を記した礼状が今も届くそうだ。「女房は弟子たちから女神さまと呼ばれていて、先生は8段だけれど、そのうちの5段が奥さんで、先生は3段だなんて言われる」と、とびきりの笑顔がはじける。偉大な武道家も奥さんには頭が上がらない?ようだ。

昭和47年、所沢に48畳の専門道場を開くと同時に、本部道場の指導部師範を辞任。合気道の普及に拍車がかかった。多摩地域、埼玉、神奈川、千葉へと小林道場は拡大していった。それは国外へも及び、現在北米、南米、ヨーロッパ、東南アジア30か国に指導員を派遣している。道場に続く事務室のカレンダーには毎月海外への指導者派遣スケジュールが書き込まれている。現在道場長を務める息子の弘明さんや専門指導員が海外へ出向くことが日常なのだ。道場開設の頃は子供だった門弟たちが、今は指導者となっている。小林さん自身も2月はハワイ、3月は北欧、来年5月のネブラスカ州からの招待も届いているほど。海外で、総師範の指導を受けたい人たちが山ほど待っているのだろう。

昭和53年、スウェーデンからの内弟子第1号を皮切りに、毎年海外各国からも男女を問わず、小林道場へ「住み込み研修生」がやって来る。その中で渡航費や滞在費用が経済的に困難な場合は、道場内外からの寄付による、独自の「むすび基金」で援助。これまでに17か国からこの基金により、約60名の内弟子を迎え入れた。国内外での活発な国際交流は「愛と和合と世界平和」という合気道の精神を確実に実践している。

2時間の稽古が終わると、総師範を囲んでのお茶の時間。現在の内弟子、トルコ人のレジェップさんがかいがいしくお茶の準備。「小林先生はいない時は神様のような存在。いる時はおとうさんであり、すべてです」とレジェップさん。「この道場はみな平等で、親切。コミュニケーションしやすい雰囲気があるんです」という、カルロスさんはアルゼンチンの大学の先生。夏休みの2か月間を住み込んで修行中だ。

今も4歳の子から教えている。正座して挨拶、帯を結ぶ、基礎体力、受け身を覚えケガをしない。そんな武道の良さを身につけさせたい。合気道を通して国際人を育成したい。「女房からは『合気道しかできないね』といわれる(笑)。その合気道のお蔭で、このトシになっても必要とされるし、皆が集まってくれる。この道は際限がないけれど、一人でも多くの人に合気道を通して関わっていきたい」。世界規模の人的財産は計り知れない。すばらしい合気道人生である。

（小平市在住）